

四 広島県庁へ転任

広島県庁に
転任の動機

昭和十七年（一九四二）一月、広島県立青年学校教員養成所長の岡本半次郎先生から、三月からは非本校に来てほしいとの要望があった。それより以前にも県庁から県立校に出ないかと勧められたのだが、現在校に愛着心が強くて断つたので、そのことを岡本校長先生に申しましたところ、「しかし貴方は教育ただ一筋に生きるという信念でやっているというが、それならその教育者の教育をする、すなわち教育者の養成をする本校の教師になるのだから、なおさら貴方の主旨に添うことになるのではないか。」と理論詰めにあったので、なるほど成程と思
い直していた。

いささか心が動いているとき、県庁からも、銃後の婦人の力を強化せねばならぬので、その指導のために来てほし



永年にわたる教育活動が認められ
広島県指導主事となる 1942年

いとの強い要望があったので、県立青年学校教員養成所からの要望のあることを申したところ、「それは同じ県のことなので、学務課に割愛をしてもらうからその事は心配ないから決心してほしい。」ということで、県庁内の話し合いのもとに県の指導主事として三月から県の方に出ることに決定した。

その直後、呉市の小田福松学務課長からお呼びの声がかかったので行ってみたら、小田課長から「実は今回、水野甚次郎市長が辞任されるので、僕も進退を共にしようと思うので、そこで退任後は女子の私立学校を創りたいと思うが、それには是非貴方が必要なのだ。自分は女子教育には経験もなく、もちろん自信もないので、自分は校主・校長という立場で、教育経営は総て貴方に一任してやってもらおうと思って、そのような計画をたてているのだが、どうか決心してくれないか。」とのお言葉なので、私は、小田課長の意外な言葉に驚いたのである。なぜかというところ、この小田課長には随分辛くあたられ、五年間も昇給停止されたので、よもやそんな声がかかろうとは夢にも思っていなかったからである。

五年間の昇給停止に至った経緯はこうである。昭和八年に、呉市の某学校に在職している私の最も親しい教員が、或る酒の席で校長の気に入らぬことを発言したのを根に持たれて、退職勧告を受けたのだ。もちろん、退職勧告に至るまでには、校長は小田学務課長に十分相談された結果であったと思う。そこで私とその退職勧告

を思い止まってもらうために動いたのである。

当時の呉市長は貴族院議員の水野甚次郎殿であり、衆議院議員の宮沢裕先生とは御懇意な間柄であったので、私はこの件について宮沢先生から水野市長さんにお願ひしていただくよう、御依頼したのである。それによつて、退職勧告は思い止まってもらつたのだが、上司から言われて思い止まらねばならなかつた小田課長の心中はどんなに嫌な辛いい思ひであつたことか、今にしてよく分かる。ともあれ、その当時の私への風当りは随分きつかつた。教育者が政治的運動に走つたという理由のもとに、五カ年俸給が据え置かれ、年末賞与も誠にお印し程度で、あれやこれやで罰せられた私なので、課長のその時の言葉に意外を感じるのは当然であつたのである。

私はそのとき、小田課長に、二カ所からお迎えの聲がかかつている話をしたところ、「自分がほしい者は、他の者もほしいかなー。」と大きな溜め息をしておられた。相手が県庁ということになると、自分の方は断念せざるを得ないということ、どうしてもということころまではいかなかつたのである。その後、小田課長は辞任されたが、結局私立学校の設立はされなかつた。

私はその要望に応へることが出来なかつたために、私学設立も断念されたということは、それほどまでに私なる者を教育者として高く評価していただいていたことで、深く心を打たれる。

小田課長は聡明な方で、御性格もはつきりしておられ、いいたいことやりたいことは、てきばきやつておられた。したがつて悪いとなれば徹底的に、また良いとなれば前者と同じくすぐく大事にされる方だつたようである。

私は、昭和十七年三月末で、呉市での十七年間の勤務に終止符を打つた。その後、小田先生の消息はよく分らなかつたが、終戦後は呉駅前で薬局を開いておられたとか。そして数年前、胸部疾患で遂に黄泉の客よみとなられたことを聞き、おいたわしく思ひ生前をおいたびしている次第である。

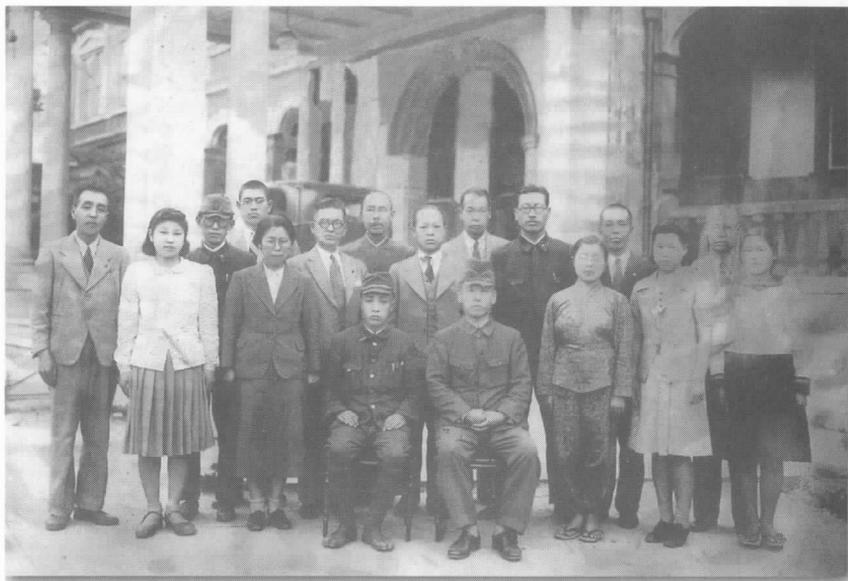
県指導主事就任後の活動

昭和十七年三月末をもって、呉市立阿賀高等実践女学校にお暇いとまして、昭和十七年四月に広島県指導主事として赴任した。大東亜戦争の真最中で、国民総動員という時である。

社会教育の一環である女子青年・婦人会の指導が主務であるが、銃後の婦人の力を強化ということが当時としては大きな目的なので、その意味を持つての講習会・講演会・座談会、或いは勤労奉仕、留守家族への慰問等々、各種の行事を計画し、夜となく昼となく懸命にやった。

県庁に赴任した年の七月に、茨城県の水戸市郊外にある有名な加藤寛治先生が校長をしておられた国民高等学校で、一週間の講習があった。それに参加して日本魂の浸透した教育をなさる加藤寛治先生の教育を観せてもらい、またその教育を受けたのである。日本人独特の使命感（義勇奉公の精神）、勤労愛好の精神の練成はなかなか徹底し、効果大なるものを強く感じた。

満蒙開拓義勇軍訓練所も見学した。大規模な施設で多



広島県指導主事時代のミキ先生（中列左から3人目） 1943年

数の青少年の教育をされていた。そこで訓練を受けた青少年は、やがて滿蒙開拓の実施に当たっていたのである。当時の日本は、国連から脱退して満州国独立を認めたので、滿蒙の開拓と満州国の發展に協力せねばならぬ義務と責任があるわけで、国を挙げてそれに力を入れていたのである。これも日本の国としては色々と考えがあったことはいうまでもないことである。今にして思えば、教育の在り方を含めてすべてが戦争の方向へ押し進められていたのだが、そういうことはまったく考えない忠君愛国一本槍の私であった。ましてや、満州独立を侵略などとは思ひもしなかった。認識不足もはなはだしいのだが、当時の日本人は、だいたい私と同じようなことではなかったろうか。

満州・朝鮮視察　　そうした認識のままで同年九月二十日から一カ月間、満州・朝鮮視察に出向した。ちようど今から三十年前、私が四十一歳になるちよつと前であった。そのときの自分としては、決して若いとは思って

いなかったが、今にして考えてみると、年齢も気分も身体も若くて強くて気魄があった。

朝鮮は内地と変わらない感じであった。もちろん当時は日本国であったのだが、ちようど十月であったので、広い田園には、稔った黄金の波がただよい、その中で白衣の民が稲刈りをしていた。内地を離れて一週間くらいしかならないのに、季候・風土など日本の風景と変わらない情景を見て故国を想い、懐かしい感に打たれた気持ちが未だに忘れられない。広漠たる広野を西北へ西北へと走る汽車の中で、歌の文句にあるように真つ赤な大きな太陽が地平線に落ちてゆく光景は、まったく大陸でなければ見られない。日本の狭さを感じるとともに、大陸の良さをつくづく感じ、大陸の發展に貢献したいと強く感じた。

上海、ハルピンなど、随分奥地まで行ったが、至るところに在満日本国民学校があった。これは日本が満州国開拓のために、また日本の發展のために出向してそれぞれの部門で働いている人たちの子女が学んでいる学校である。これを見学し、ここでも満州国独立のために日本人が力を入れていることを強く感じ、いささかでもその力になりた

いと思つたものである。

ともかく、国民学校・中学校・専門学校・大学等も見学したが、内地と変わりない立派な教育がなされていた。国民学校の児童に「日本へ帰りたいことはないですか。」と聞いたら、「いや」と一言だけ答えてくれた。満州での日本人の開拓には、いろいろな部門がある。一般的なのは、広大なる原野を開拓して農耕にあたるもの、産業開発にあたるものなどであるが、農耕はコウリヤン・トウモロコシ・ジャガイモ・大豆・小豆・小麦等であった。米も作れるように土地改良もなされていたが、まだ当時は十分でなかったため、稲は作られていなかった。きつと朝鮮あたりから輸入していたのではないかと思う。したがって米食は十分していなかった。コウリヤンを粉にして小麦粉を混ぜて、うどんのようにして常食としていたようであった。ジャガイモにしても、小豆にしても、誠に見事な収穫であった。満州の十月は、零下になるほどの寒さであった。各府県から一名ずつの視察員なので、お役所の方など合せて五十名の団体であったが、あの広い満州を、或るときには汽車で、或るときには馬車で、或るときは徒歩でと、強行軍で廻った。

吉林省で義勇軍の宿舎に分宿したときも、当時の満州の未開地は衛生面が非常に欠けていたため、汽車の中でも、また開拓団や義勇軍の宿舎等にもシラミが多かった。汽車の中でシラミがごそごそ這っている場面もたびたび見つけた。当時は、それほど衛生面でも不行届の所が、広い満州にはあったのである。家も、開拓民や義勇軍の住むものは概ね手作りで、誠に粗末であった。しかし、冬の寒さにはだけは十分心が配られた作りであった。寒地には寒地に相応して、学校にも民家にもそれぞれの設備がしてあるし、人間は大人も子供も寒さに備える服装で、零下三十余度でも結構別に辛い思いをしなくても暮されるように出来ていた。普通の家庭は、むしろ日本の冬より、オンドルとかペチカとかで、ほかほかと気持ちの良い部屋で睡眠ができるようになっていた。

また、滿蒙開拓民・滿蒙開拓義勇軍等が、如何に將來への大きな希望と夢を持って苦勞しているかをまざまざとこの目で見、この肌感じた。内地にいる我々は、この人たちを何とかして励ましてあげねば、それと同時に内地にいる者はずっともつと心を引き締めてやらねばと強く感じたわけである。

暗雲たなびく昭和十七年秋のこと、今から考えれば敗戦になる三年前だったわけであるが、国境に立ち、遙かかなたのシベリアを見つめて、何とも言葉では言い表わせない、感無量であった。これからの滿州国独立の將來は、朝鮮は、ソビエトは、どのように展開するのであるか。そして日本は！ 無条件降伏など夢にも想像しなかった私は、やはり日本は強国であると信じていたのである。

それにしても、滿州開發のために滿州に行っていた多くの日本人で、滿州の地において終戦を迎えた人々は、この第二次世界大戦のために出征して御国のために尊い生命を捧げてお尽くし下さった兵隊さんに次いで御苦勞をされ、犠牲を払われ、人命を失われたことを思うとき、申し訳ない次第で、滿州視察記を書くにつけ、なお一層その感を強くする。と同時に、日本侵略の犠牲となられた中国や朝鮮の人々にも、本当に申し訳ないことだったと思うのである。敗戦後の日本は、わずかな年月で復興し、戦前の暮らしと比べものにならぬほど物資にも恵まれ、何不足なく生活が出来ていることは、ここに至るまでには戦前の多くの犠牲者のあることを決して忘れてはならないのである。

日輪兵舎

そのころ、滿州でも、日本の茨城県の日本国民高等学校へ行つたときも、また広島県の七塚原の県立修練農場にも、日輪兵舎があった。この日輪兵舎は、文字の如く形が丸くて周囲が床になっていて、そこに畳の代わりに莫蔭こぞが敷かれ、そこで寝起きするのである。これが一般家庭という座敷である。その中は空間で、土間である。この土間の中央に囲炉裏いろりがあって、ここで夜は火を焚き、その火を囲んで皆で一日を語り合い、明日への備えを話し合い、誓い合い、ここに集う者の憩いの場であるとともに意気を鼓舞し、和協の精神を養う場でもあつ

たのである。粗末な建物であったが、実に合理的に出来ていた。現在もあのような建物の中で、人間の真の姿、偽らない飾り気のない姿を見出したい気がしてならない。

金殿玉楼きんでんぎよくろうの建物の中での生活に憧れる人もあるかと思うが、時には日輪兵舎のような建物の中での生活も良いと思う。

日本魂の浸透

広島県でも、戦前から、また戦争中はもちろんのこと、人間作り日本魂作りを目標として、県下の青年団や婦人会などを幾つかのグループにして、七塚原の日輪兵舎で、また福王寺とか仏通寺とかいった精神修養の場を選んで、講習をしたものである。また或るときは、学校とか公民館とかいった所で、講演会・座談会等を催していた。それは県の主催のものであったが、地方単位で催されるものもあつた。そうしたときにはよく講師として招かれて、日本魂や日本女性を語つたものである。

或るときは一日三会場を、一人で担当して廻つたことがある。午前・午後・夜の部がみな別の場所だったので、その日は九里（三十六キロ）徒歩であつた。もちろん昼食は座つて食べる時間はなかつたので、道を歩きながら日の丸弁当を食べたが、その時のうまさはまた格別であつた。

こうして、意気、気魄、希望の毎日を繰り返していたが、ちつとも疲れなど覚えたことはなかつた。

敗戦国となつた　　こうして戦争中は統後の婦人の力の強化に努力してきたが、思いもそめなかつた敗戦、私だけ日本の惨めさ　　でなく日本国民全員が、この敗戦にはまったくがっかりしてしまつたと思う。

敗戦の惨めさをつくづくと感じた。『国破れて山河在り』というが、広島の地は山河もなかつた。

人類滅亡を招く原子爆弾は、昭和二十年（一九四五）八月六日午前八時十五分、広島市に投下された。市民幾十万人の半数は尊い生命を奪われ死傷、建造物は一瞬にして灰燼かいじんと化した。

私も、当日県庁にいたら、即刻白骨となるころであつたのに、ちようど比婆郡方面へ出張中であつた。そのとき、比婆郡の方では、広島には何かひどい爆弾が落ちたんだそうだななど、云々で、原子爆弾とは全然知らずに帰つて来てみれば、二日前の広島とはまったく変わり果てた広島となっている実状を見て、気も失わんばかりの私であつた。先輩・同僚の骨拾いに、焼け跡の灰の中をごそごそ掘り分けてありあわせの空缶に骨を納め、県庁の避難先である中国新聞社の二階に持ち帰り、安置して四日後に遺族にお渡ししたのである。

常石の里の方では、兄や姉や親族一同が私を心配して、姉の三男神原安夫を広島にさし向けた由、そのときは私を探し当てることができず、安夫は空しく何の消息もつかめぬままに、一昼夜日乾しになって家に戻った由を後から聞き、申し訳なく思つた。肉親が私の身を案じてくれていることなど全然気もつかず、ただその場のことにみに心を奪われ、ひたすら犠牲者のことにのみ専念していたのである。私は何でもこのとおりで、その事のみ打ち込んで物事をやる性なまの人間であるが、そのときは一段とそれが強かつたのだと思う。一週間も十日もたつてから、肉親の心配していることに気が付いたようなことであつた。

ちようど、爆弾投下の一カ月くらい前、私は安佐郡緑井村に疎開していた。緑井村の向いの川内村では、広島市内の家屋疎開の勤勞奉仕のため、村をあげて（銃後にいた男性は、全部といつてもよいほど）広島市に出ておられたので、全滅であつたのである。その川内の川原には、死体が山をなしているのを見て、これが人間の人生の最後とは実に憐れなものと、いたわしさと戦争に対する憎しみを強く感じながら熱い涙にくれたのである。

続いて八月九日には、長崎に原子爆弾が投下され、広島と同様目も当てられぬ憐れでみじめな光景が繰り返された。その長崎へ投下される一日前に、ソ連は日本へ宣戦布告したのである。日本が敗けるのを見抜いて戦争を布告したというわけだ。日本が勝つような風向きだつたら宣戦布告はしなかつたのではないかと思う。

八月十五日、ちようどお盆であるが、日本国民はお盆どころの騒ぎではない。正午には天皇陛下の重大ニュースがあるという。ラジオの放送なので、十二時が待ち遠しかった。十二時三分前からラジオの前に座って姿勢を正して待っていたら、陛下よりのお言葉は全然想像もしなかった内容であった。第二次世界大戦は降伏の止むなきに至ったということを国民へお知らせになったのである。齒痒いやら、残念なやらで、涙がとどめもなく出る。その涙の中から日本は降伏したのだとさとした。

そうなると日本の国は今後どうなるのか、天皇の地位は等々、私はやはり大和民族の血の強さを感じた。それとともに私は実に一途に日本を信じていた。(その裏は物を知らないことにもなる、それは今にして思うことである。)日本は強い、日本は必ず勝つと信じ切っていた。また勝たねばならぬのだと張り切っていた。敗けるなどとは夢にも思わなかった。また思いたくもなかったのでそんな事は考えもしなかった。馬鹿だといえば馬鹿だし、純情だといえれば純情なのだ。まあ私はそれで良いのだ。それだけに、わが日本国を信ずることは考え方によっては悪いことではない。統治権はないが、天皇制は残るということを聞いて、敗けたのには天皇制が残されるなら我慢しようと、自分で諦めをつけた。それにしても、戦争中は、勝て勝てと一生懸命県下を廻っていただけに、敗けたことが残念でたまらなくて食べるものも喉をこさぬほどであったが、天皇制の存続がせめてものなぐさめであった。敗戦後は、日本国民であるからには、日本国の国是に従っていくのが道であると考えたのである。

戦前とは変わって、国の行政もあらゆる面で改革がなされ、民主化、民主政治の世の中となった。明治憲法から民主憲法に変わり、国民はこの民主憲法の下に生活せねばならぬので、私は戦前の勝て勝ての説を切り替えて、新憲法解説をして県下を廻るとか、新憲法による婦人の地位や役割が変わったことを説いてまわった。

選挙管理委員会、貯蓄推進委員会、その他何々委員会といった中に婦人部が新設され、その人選の任を申し付けら

れたので、増川ヒサ、杉原菊代、久留島フジエ先生等々を推薦し、御活躍を願った。

身体が不調
となる

戦前、張り切っていた意気込みが抜けたのと、学校に勤めていた二十一年間と県庁に勤める間の無理な生活が体力を相当消耗させていたのか、身体が悪くなって仕事に耐えられぬようになった。

昭和二十一年（一九四六）の終わりごろから、咳が出る、汗が出る、根気が続かない、微熱が続く、腰が痛むといった状態になった。県庁医の加谷女医に診てもらっても、たいしたことはないと言われる。廿日市町に県病院が移ったので、そこへも診察を受けに行ったり、袋町小学校内に県病院の分院が一時宿借りをして診察をしていたので、そこでも診てもらったりした。

血沈が百七十も下ったので、病院長もびっくりされた様子だったが、別に病名もつけられず安静にしておれという程度で、そのうち首の右方に大きなグリが現れてきた。可部の保健所長米沢進先生に診てもらった。先生はなかなかはっきりとしたことをいわれる医師であったが、何にしてもこんなところにはらぬもののあることは邪魔だ、取つてしまえと、しきりにいわれた。今度は日赤に行つて診てもらった。病名はつけられなかったが、摘出した方が良かったろうということだった。

大内外科病院が可部町にあつたところで、とうとう大内病院へ診てもらいに行つた。同じく摘出した方が良いということで、二十二年の十月二十日に手術をすることに決定して、大内病院で手術をしてもらったのであるが、いよいよ手術に取りかかってみると、各医師方の外から診ておられたような簡単なものでなかった。場所が首なので頸動脈がそのグリにからみついて、それをメスではずされるのに、大内院長、吉永副院長、他からの医師一名の三人が随分苦労された。遂にメスが動脈にさわると頸動脈が切れて血液が一時に流れ出て、その血液が肩甲骨のあたりまで来たまでは覚えていたが、それからは失神してしまつて分からなくなり、病室に運ばれてから気が付いたような危ない手術で

あつた。その摘出物は、肉腫か或いは癌性のものかも知れぬということで、退院後はコバルトをかける必要があつた。疎開した大内病院にはその設備がないので、緑井の今井病院に行った。今井病院長から、癌だったら短くて一年未滿、長くて七年しかもてぬと言われたときは、まったく死の宣告を受けたような気がして悲しみのどん底に落ちた。

そのうち、摘出物を大内院長の出身大学の附属病院に送り検査をしてもらつた結果、結核性の淋^{りん}巴^ば腺だと判明し、不幸中の幸いだったことを喜び、その後一段と元気がついて養生に専念した。しかし、その結核性のものが首や骨へも来ているとは、予想しなかつたのである。

その後、腰が痛くて痛くてたまらなくなつてきたので、その治療を始めた。これは長年の使い痛みという診断をされる医師、また神経痛という医師もあり、痛いときにはとにかく迷うもので指圧に行つたり、鍼・灸にも行つたり、手術後ずつと治療を続けたのである。ただ使い痛みや神経痛なら半年も治療を続ければ全治するであろうに、次第に悪くなり、左の股脇が痛み、まともに歩けず、足を引きずりながら歩かねばならなくなつた。それでも医師には解らなかつたらしい。また私も、使い痛みや五十肩の神経痛などにあまり心を奪われて神経を使うことはいらぬと思ひ、医療から離れて、鍼・灸に専念したのである。

そのころは職を退いていたので収入もなく、二十七年間勤めをしたけれど、貯えもなかつた。それは、武田一家の生計の全部を引き受けてやつてきたのと、私自身の勉強や研究にも投資してきたからである。私自身の生活は節約に節約を重ねて切りつめられるだけ切りつめてきたが、武田家に対しては二十二年間、物心共に自分なりの最大限を尽くしてきたので、今でも決して心残りはない。

県庁退任

話が前にもどるが、敗戦後といえども、新憲法下で国の方針に従つて新日本の建設に尽くさねばと思つていたが、前述の如く健康を害し、二十二年の初めごろから欠勤が多くなり、とうとう四月頃から出

勤が出来なくなつた。長期欠勤することは、県庁へ対しても県民の方へも迷惑をかけることになり忍び難いので、県官としての締めくくりをしないままに退任することは、あまりにも無責任のようで誠につらい思いがしたけれど、六月初め退任をお願いした。八月三十一日付で許可になつたが、そのときの県よりのお言葉に「病氣となれば致し方ないことだが、まだまだ貴方にはやつてもらいたいことが沢山あつて期待をかけていた。」ということであつた。